

前回、前々回と、自閉症支援の現場で〈多くの人たちが根拠もなく絶対的事実であると信じている事象〉を神話と称して、身近な三事例を紹介して来ました。神話その1では、「自閉症者は我慢ができるようにならない人」、神話その2では、「集団内で一人にわがままを許せば、みんなが羨ましがる」、そして神話その3では、「偏食することは絶対に悪いこと」について、取り上げました。今回は、少し視点を変えて、対人関係の在り方に触れたいと思います。

#### 【神話その4】

H男さんが保育士養成校施設実習のA子さんの手を強く握って離しません。「散歩に行きたいのではないか？」と散歩に出てみましたが、2回3回と出た散歩が終わっても、手を握る強さは変わりませんでした。「必ず戻って来るから」と無理に手を離そうとしますが、今度は爪を立てたり引っ掻いてきたりと、どうも逆効果のようです。食事の時間やおやつ時間は、職員が呼びに来てくれることで手を離してくれるので助かりましたが、いよいよ実習が終了という時間がやって来ているのに全く手を放そうとしてくれないことには、さすがに焦りを感じました。「あしたまた散歩しよう、約束だからね」精一杯のポジティブメッセージを届けますが、H男さんの手はちっとも緩むことがありません。さらに強く握っているようにさえも感じます。

A子さんは、そこでH男さんの居室で〈♪およげ！たいやきくん♪〉や〈♪大きな古時計♪〉の曲がラジカセから流れていたことを思い出しました。そこで、藁にもすがるような気持ちで、〈およげ！たいやきくん〉の唄を歌ってみました。心なしかH男さんからは笑顔がこぼれたようです。さらに〈大きな古時計〉

を歌いました。すると、なんということでしょう、彼の手が離れたのです。A子さんには、まだ自分の実践の意味はわかりませんでした。手が離れた喜びだけは確実に沸き上がってきました。

A子さんは、手が離れなかったとき、一生懸命に、「また明日必ず散歩ができること」を約束して、手を離してもらおうと試みました。しかし、その方法は彼の攻撃性を強くしただけで効果が全くありませんでした。A子さんにとっては、彼との心理的な距離を縮める有効な手段だと思われた散歩の約束というその方法は、実は手を離そう、離そうとする心理的距離を遠くする結果を招いていただけだったのです。次に実践した彼の大好きな歌を歌うという方法は、彼から離れようとする方法とは全く逆の方法です。離れようとすることを諦めて逆に近づこうとした支援方法です。すると手が離れたのです。

人間は、不安が高いと近づいて、安心が高まれば離れる。そんな心の流れをここから読み取ることができます。

例えば、そのような心の流れは、子どもの発達において母親との関係の中で垣間見ることができます。母親に見守られながら砂場で遊ぶ2歳児は、不安が高まれば、母に近づき、安心すれば離れてまた砂場で遊び始めます。実はストーカーの心理も同じです。不安が高まるから、付きまとうのです。

どうですか？皆さん、離れようとしないうち（≒自立できない時）に、離そうとして（≒自立させようとして）、鍛えたり、訓練したり、叱責したり、怒ったりしていませんか？それは、世間の常識だったり、育児の常識だったりしているのですが、実は神話なのです。